

加藤章著『戦後歴史教育史論 - 日本から韓国へ』

伊藤純郎*

本書は、戦後社会科歴史教育の研究と実践の両面における牽引者で、かつ日韓歴史教育研究交流の先駆者である元上越教育大学学長加藤章氏が、戦後歴史教育史研究の一端として試みた1980年代以降の論考、社会科歴史の実践的内容論、日韓歴史教育研究交流へと展開した論考のなかから、とくに社会科日本史教育に焦点を当て、「現代における問題意識と交錯する資料的なものを選んで編集した論集」(5頁)で、各部・章の表題(原題と初出誌・年代)は、以下の通りである。

はしがき

第I部 社会科歴史教育論の成立と展開 - 戦後歴史教育の原型と変容

第1章 戦前の歴史教育 - 国体論的歴史教育
(「日本史教育の理論」『講座歴史教育』第三卷, 1982年)

第2章 戦後歴史教育の原型と社会科の成立
(「戦後の歴史教育の出発と社会科の成立」『講座歴史教育』第一卷, 1982年)

第3章 「社会科歴史」論の成立過程 (『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』第3号, 1980年)

第4章 戦後学校教育史における社会科歴史の位置
(「学校教育における社会科歴史教育」『学校教育研究』第2号, 1987年)

第5章 和歌森太郎と社会科歴史論 (「和歌森太郎と歴史教育論の展開」『和歌森太郎著作集』第13卷, 1982年)

第II部 社会科歴史教育の視点 - 歴史教育と歴史研究

第1章 社会科歴史の構成原理の変遷 (「社会

科日本史の原理とその展開」『地方史研究』第169号, 1981年)

第2章 社会科日本史と「文化の総合的学習」 - 「近代文化の形成と発展」の学習展開 (「近代文化の形成と発展」『高等学校学習指導要領の展開 社会科編』, 1978年)

第3章 社会科歴史教育における「地域社会の歴史と文化」 (「歴史教育と地域」『地域に学ぶ社会科教育』, 1989年)

第4章 国際化に向けての歴史教育の立場 (『社会科教育』323号, 1989年)

第5章 環日本海文化の歴史的視点 (講演記録) (『Frontier』9号, 1991年)

第6章 歴史研究の多様化と歴史教育内容の変化 - 構成原理としての社会史 (『社会科教育論叢』第37号, 1990年)

第III部 アジアの中の社会科歴史教育 - 日韓歴史教育交流の展開と展望

第1章 戦後日韓歴史教育交流のはじまり (「歴史教育交流のなかで」『教科書を日韓協力で考える』, 1993年)

第2章 歴史教育における「史実」と歴史認識 (『上越社会研究』第3号, 1988年)

第3章 「征韓論」から「朝鮮開港」まで (「征韓論」から「朝鮮開港」まで (日本史教科書分析) 『朝鮮・韓国は日本の教科書にどう書かれているか』, 1992年)

第4章 東アジアの近代化過程をどう叙述するか (『世界史教育と東アジアの近代化像』, 1993年)

第5章 日韓歴史教育研究の一つの前提 (『現

*筑波大学

代社会科教育論』, 1994年)

第6章 日本からみた韓国の歴史教科書 (『比較文化研究年報』第13号, 2001年)

第7章 日韓歴史教育研究交流と李元淳先生 - 『韓国から見た日本の歴史教育』を中心として (『李元淳』『月刊韓国文化』第17巻2号, 1995年)

あとがき 著書・論文一覧

初出一覧・解題 (海野正信)

各部・章の表題 (初出誌における原題) からうかがえるように, 本書は, 歴史教育史研究, 歴史教育論研究, 日韓歴史教育交流研究の三つの研究テーマにもとづく各論考が, 20世紀後半を戦後社会科歴史教育とともに歩んだ著者の「同時代史」と重なるように配置されている。

各論考の概要に関しては, 上越教育大学教授海野正信氏による簡潔ながらも的確な「解題」が付されているので, 本書を通読して評者が感じたことを三点ほど記して, 書評の任を終えたい。

第一点は, 第I部「社会科歴史教育論の成立と展開 - 戦後歴史教育の原型と変容」に関して, 戦後の歴史教育の多様な潮流が「社会科歴史」として結実する過程を考察する方法が, 「小学校以来の皇国史観も敗戦によってぐらつき自ら新しい歴史像を作り出さねばならなかった」(381頁)という“原体験”にもとづく問題意識と, 東京教育大学文学部日本史学科で培われた史資料や歴史事象の精緻な分析・解釈をふまえ, 文部省内の担当官や中等国史教科書編纂委員会委員などの行動を丹念に辿り, 彼らの言葉により沿いながら「内在的」に考察するという方法で行われていることである。こうした方法は, 戦後社会科の歩みに正面から立ち向かうことなく, 「外在的」かつ「後付」の論理で戦後社会科教育史を裁断する傾向が強い近年の研究動向に対する, 著者の批判的立ち位置を示すものと思われる。

第二点は, 第II部「社会科歴史教育の視点 - 歴史教育と歴史研究」に関して, 歴史教育の内容論や実践論が, 中学・高等学校教諭としての経験をふまえ, 教員養成大学教員, 文部省学習指導

要領解説社会 (日本史) 作成協力者など様々の立場と視点から, 「視点を切り替えて見るトンボのような複眼」(240頁)で, 多面的に記述されていることである。評者が本書と一緒に頂いた書面には「文部省型といわれそうですが, “体制内左派”のように批判精神を持ち続けたつもりです」と記されていた。評者も中学校社会科学習指導要領作成に関与した経験があるが, そうした意味において, 社会科解体後二度の改訂をへた地歴科日本史に対して, 「社会科歴史」との連続性の視点からの考察を, 「付記」のコーナーで加筆していただきたかった想いがする。

第三点は, 第III部「アジアの中の社会科歴史教育 - 日韓歴史教育交流の展開と展望」に関して, 著者の20年近くにわたる日韓歴史教育研究交流の取り組みが, 研究交流の中核を担った著者自身の言葉で語られており, 海野氏が指摘するように「それ自身貴重な歴史的資料となっている」(407頁)ことである。現在, 日韓歴史教育研究交流は様々なルートを通じて行われ, 評者も東北亜歴史財団主催の日韓歴史教科書ワークショップに何回か参加した経験がある。現在活況を呈している日韓歴史教育研究交流の原点に, 著者の活動があったことを忘れてはならないだろう。一方, 韓国『東アジア史』における近代史の記述内容に著者らの研究交流の成果が投影されているという指摘 (國分麻里「韓国『東アジア史』における近代史の内容分析」『中等社会科教育研究』第31号)がある。著者ら第一世代の研究交流の成果が, 日韓歴史教科書の記述内容にどのように反映されたのか――。この課題を考察するうえで, 著者の語りは貴重な「証言記録」となる。

本書を通読して, 30年前に『講座歴史教育』と『和歌森太郎著作集』を手にした時の思い出が蘇った。

日本史必修論, 学習指導要領解説改訂など歴史教育をとりまく状況がかまびすしい現在, ぜひとも“読了”していただきたい著書である。(東京書籍, 2013年10月刊, 411頁, 2200円+税)